感染症と近代日本の公園計画論

Infectious diseases and theories of public park planning in the modern age of Japan

小野 良平 Ryohei ONO

立教大学観光学部

1. 広場の焚火

今回の新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延を受けて大きく脚光を浴びたのは、アルベール・カミュの『ペスト』(1947年発表)であったが、疫病をモチーフとした文学としては、この他にトーマス・マンの『ヴェニスに死す』(1912年発表)を挙げることができる。疫病はこの作品の中心的主題というわけではないが、20世紀初頭の観光・リゾート都市ヴェネツィアを舞台に、コレラが蔓延する不安が物語全体の伏線として描かれている。保養に訪れた主人公は街の異変に徐々に気が付くが、投宿するホテルなどはこれをごまかそうとする。見えない疫病が人々の体だけでなく心を穏やかならざる状態にするのは、今回のパンデミックで誰しもが実感しているところと思われる。

ところでこれを原作としたルキノ・ヴィスコンティ監督の同名の映画(1971年公開)では、主人公が街をさまようシーンで、街路や広場のあちこちに火が焚かれているカットがわずかな時間ではあるが登場する。暴動や戦乱、ある

いは火災を描いたわけでもないこの焚火の意味が当初はわからなかったが(原作には描かれていないようである)、これは疫病を追い払うための火である可能性がある。それというのも19世紀までは、伝染病の病因としては瘴気(ミアスマ・miasma)と呼ばれた湿った土地から湧いてくる悪い空気が原因であるという説が有力で、これを散らす一つ的手段として、街路や広場などで焚火や燻蒸が実際に行われていた¹⁾(図-1)からである。この説は1884年にロベルト・コッホがコレラ菌を発見したことにより否定されていくのだが、ただしヒポクラテスにまで遡るというこの伝統的な瘴気説は直ちに消えなかったようである。作品の時代設定は20世紀初頭だが、映画では殺菌のための消毒液を散布するカットなどもあり、既に瘴気説一辺倒ではなかったことも窺え、その時代考証が正しいとすればそのくらいの時代までは焚火策がまだ残っていた可能性がある。

百年少し前に、今からみれば非科学的なことを行っていたわけであるが、しかしこの瘴気説はその対策として土地を乾かし清潔にすることを求めた。結果として西欧の都市で進められたのは下水道や上水道の大規模な整備であり、焚火などはむしろ苦肉の策であったようだが、つまり瘴気説は都市の近代化に大いに貢献した。日本ではちょうど明治維新を経て近代化を急迫する時代であったが、この瘴気説が萌芽期の都市公園の計画論にも影響を与えている。「コロナ禍」での公園を考えるのに際し、疫病と向き合っていた公園計画の初期の頃を振り返ることで、何らかの一助にすることができれば幸いである。

2. 公衆衛生理論と公園計画論³⁾

日本の公園史では、明治6年(1873)の太政官布達第十六号をエボックとしながらも、その後は明治36年(1903)年の日比谷公園開園あたりまでは目ぼしい話題に乏しい。というのも実際に空間として新設された公園が、特に東京ではこの間極めて少ないからでもあるが、まさにこの間の明治10-20年代には、ほとんど実現はしなかったものの、近世までの勝地を継承した太政官制の公園とは異なる、新たに整備するような公園についての議論と計画が進められ

図-1 1832年英国 Exter 市における街路での燻蒸²⁾

ていた。それは具体的には、東京で展開された「市区改正」における公園計画である。市区改正は今でいう都市計画に相当するもので、その中心は道路を中心としたいわゆるインフラ計画・整備であり、その一つに公園の計画が含まれていた。まだそこには存在しない公園を生み出そうというのであるから、当然ながら新しい公園に何を期待するのかという機能論が芽生えることとなる。

（１）「都市の肺臓」論

明治 18 年（1885）に内務省に設置された東京市区改正審査会（以下適宜「審査会」）において、初めて公園計画の論議がなされた。結果 9 か所の大遊園と 43 か所の小遊園が決定され、この成果は一時的中断を経て、明治 21 年（1888）以降東京市区改正委員会（以下適宜「委員会」）において原案として審議が進められた。なお審査会では審議の過程で公園ではなく遊園と称されたが、委員会で再び公園という名称に戻された。市区改正の公園計画において公園に求められた機能は、現代においてもそうであるように多面的ではあったが、その中で最も重視されたといえるのが公衆衛生上の役割である。それというのも、審査会において公園の必要性を提案し、実際に計画作業を牽引したのが、内務省初代衛生局長の長与専斎であったからである。長与は公園の意義について、明治 18 年（1885）4 月の審査会の席で以下のように披露した。

人口稠密ノ都府ニ園林及ヒ空地ヲ要スルハ其因由一ニシテ足ラスト雖モ第一ニ衛生上ヨリ論スレハ街衢相連リ軒楹相望ムノ間之ニ間在シ之ニ連帯スル開豁清潔ノ場所アルニ非サレハ住民日常ノ生活産業ヨリ生スル大気ノ汚敗ヲ更新スルノ路ナク有害ノ悪気市区ニ沈滞シテ病夭ノ媒ヲ為シ其淨除揮散ヲ求ムルモ得可カラス是家ニ庭砌ナク室ニ窓牖ナキニ同シク亦身体ニ肺臓ヲ欠クニ異ナラサルナリ加之ナラス其業務ノ高下ヲ論セス多クハ室内汚穢ノ大気ニ生息スルモノ戸外新鮮ノ大気ヲ呼吸シツツ其労働ヲ回償スルノ準備ナケレハ冥々ノ間人民営産ノ力ニ於テ其失フ所実ニ費ラレサルモノアリ其準備タルヤ園林空地ヲ市府ノ内外ニ設置シテ常ニ無価ノ清風ヲ居民ニ供給スルノ他求ムヘキノ道ナシ或ハ遠隔ノ大公園ニ逍遙シ或ハ近区ノ空地ニ慰憩シ適度ノ運動ト新鮮ノ大気トニ由テ次日心身ヲ労役スルノ元氣ヲ鼓舞補給スヘシ（後略）⁴⁾

ここにみられる、公園のないことを「身体ニ肺臓ヲ欠クニ異ナラサル」とした表現したことは、いわゆる「都市の肺臓」論として後々用いられることとなる。この「肺臓」は「生活産業ヨリ生スル大気ノ汚敗ヲ更新スル」ことで「適度ノ運動ト新鮮ノ大気トニ由テ次日心身ヲ労役スルノ元氣ヲ鼓舞補給ス」る公園の機能として、現在でもさほど違和

感がない。これはいち早く産業革命の進んでいた西欧では既に認識されていたことで、例えばロンドンでは 17 世紀には煙害に対処するための緑地の設置などが提案されていた。都市の肺臓論は、まずこの文脈で理解することはできる。しかし実はそれだけでなく、冒頭に触れた瘴気・ミアスマの換気装置の意味もあったと考えられるのである。

（２）瘴気論と公園

19 世紀はコレラの世界的流行があり、日本国内では明治以降だけでも明治 10 年、12 年に大流行があり、当時の大きな社会不安の一つであった。先に触れたようにちょうど明治 17 年（1884）、コッホによりコレラ菌が発見されたところであったが、瘴気説はまだ広く支持されていた。例えば明治 18 年（1885）に医科大学教授緒方正規は、

虎列刺（引用者注、コレラ）病毒タルヤ（中略）近年「コッフ」氏ノ発見サレタル処ノモノニシテ其病毒ト称スルモノハ今爰ニ持来タラザリシガ初メ該病毒ノ発見セラルル前如何ナル土地ニ感染スルヤ否ヤ「ペッテンコーフェル」氏ノ経験ニ由テ明カナレトモ（中略）人身ニ此害ヲ与フル土地ヲシテ病毒ノ発生ヲ防遏スルハ如何スベキカ（中略）土地タル者ハ空気ヲ含有シ、其空気ハ常ニ地上ノ空気ト交換ス（中略）伝染病ハ土地ノ性質如何ニ由テ流行ヲ逞フシ或イハ流行セズ、吾人ノ健康ヲ保護スルニ敵タル土地ノ不潔物ハ何ニ由テ生ジ何ニ由テ其不潔ノ程度ヲ確定スベキカ⁵⁾

として、土地とその空気の衛生が肝要であることを説いた。「ペッテンコーフェル氏」は当時の瘴気論の代表的学者であり緒方はドイツ留学時にその下で学んでいる。長与自身も海外経験が豊かであったが、明治 20 年（1887）の講演で、コレラの病因を「微菌（細菌）」説と「土壤（瘴気）」説としてその双方を前提とした予防法を説いている。

今日衛生学士ノ社会ニ行ハルルモノハ土壤説ト微菌説トニシテ甲乙二派ニ分レ駁議抗論次第ニ微妙ニ入り理論ノ極端ニ就テ之ヲ觀察スルトキハ互ニ相容レサルモノナキニ非スト雖モ之ヲ衛生政治ニ移シテ實際予防ノ方法ヲ經画スルニ至テハ頗ル其要領ヲ同フスルモノアリ（中略）今日普通ノ予防方ヲ解剖スレハ左ノ三種ニ分ル

（第一）病毒ノ未侵入セザルニ先チ平素土地ノ汚湿ヲ淨除シ病毒蕃殖ノ培料ヲ絶ツコト

（第二）病毒ノ將サニ侵入セントスルニ際シ海港ニ要シテ之ヲ拒絶スルコト

（第三）病毒既ニ侵入スルノ後ニ於テ其滋漫ヲ制シ其撲滅ヲカムルコト

第一方ハ衛生工事（上水ノ供給下水ノ排除及ヒ家屋ノ建

築法) 及ヒ清潔除害ノ事業(公衆衛生) ニシテ平常無事ノ時ニ於テ土地ノ乾淨ヲ謀リ仮令病毒ノ闖入スルコトアルモ蕃殖滋漫スルコト能ハサラシムルノ根治方ニシテ予防方中万全ノ長策トス⁶⁾

長与の説く三法は防疫、検疫、消毒と整理できるが、この中で最も重要なのが防疫であり、上下水道の整備や家屋建築法の誘導、そして土地の「乾淨」化がその手段とされている。基本は上下水道に重点が置かれているようだが、この土地の乾淨化というあたりが、防疫装置として公園を位置づけることに関わるように思われる。少し後のこととなるが、内務省衛生局で長与の下にいた後藤新平はこのことをさらに具体的に説明している。後藤は明治23年(1890)の講演において「伝染性流行病ニ対シテ施行スヘキ方法」として、「1. 平時予防/2. 流行時予防検疫及臨時清潔法/3. 撲滅法及消毒法/4. 各個人ノ衛生」の4点を挙げ、この1点目の「平時予防」について、

第一則ハ「マラリア」病或ハペッテンコーフェル氏ノ土地ニ関スル病類ニ算入シタル諸病ニハ最も有効ノ法ナリ瘴地及ヒ間欠熱ノ本国トモ称スヘキ疆土ハ排水管、(中略)或ハ土地ノ湿気ヲ吸収スヘキ植物ニ由テ其土地ヲ乾燥セシムルトキハ之ヲ健康地トナシ得ヘキコトハ夥多ノ経験ニ徴シテ明ナリ溝渠ノ設置宜キヲ得ルトキハ地下ニ排水ノ作用アルヲ以テ地下水沈降シテ遂ニ土地ノ多病性ヲ失フニ至ルヘシ⁷⁾

と述べている。後藤は同じ講演の中で公園については、

凡新鮮空气中ニ於テ休憩スルノ衛生上緊要ナルハ喋々ヲ要セサルヘシ市府ニ於テハ公園ヲ設ルノ外他ニ道ナカルヘシ蓋シ市府ニ於テハ人家稠密ノ中ニ労働セサルヘカラス左レハ気力ヲ恢復スルニハ草木ノ植付アル公園ニ於テスルコト必要ナル論ヲ俟タス(後略)⁸⁾

とも述べており、公園の意義を瘴氣論への対応から考えていることが窺える。さらには医師でもあったことが広く知られる文豪・森鷗外(森林太郎)は、ドイツに留学しコッホとペッテンコーフェルの両方に師事し、帰国後の明治24年(1891)の講演で以下のように述べた。

衛生学上から土地を見ると、土地の中にも空気があつて(中略)又土地の中を水が流れて居たり、(中略)其風も、水も、土地より上にある風や水と同じやうに、人の体に影響を及ぼすものである。(中略)又土地の中の水は、汚を助けるもので(中略)湿っている土地を乾かすのも、衛生事業の一に算へてある。たとへば向日葵と云ふ草を

栽ゑ、或は桐などのやうに早く育つ樹を栽ゑ、それで今迄瘡などのはやつた土地を直すことが出来る。それは樹が育ち、草が育つに連れて、水を吸ひ上げ、其水が蒸発して、次第に土地を乾かす為である。⁹⁾

瘡(おこり)とはマラリアを意味するが、その語源“mal(悪い) + aria(空気)”が示すように、これもミアスマによるものと当時は理解されていた。緒方や森は直接審査会や委員会に関与したわけではないが、長与、後藤も含めて当時の先端の学知を吸収した上で基本的に共通した見解を持っていたとみることができる。そうすると植物の力を借りて土地の乾淨化を図る、ミアスマの換気装置という期待が市区改正の公園の構想には込められていたことがわかり、「都市の肺臓」にはこうした意味があったことが窺える。

なお審査会では、上下水道や建築規則については、別途取り扱うことを理由に検討対象から外されていた。従って長与は審査会の検討の中ではこれらを行うことができなかったこともあり、防疫のためのインフラとして公園を重視したものとも考えられる。しかし明治19年(1886)には再びコレラの大流行があり、政府により「下水道等改修整備訓令」が出され、また審査会に次ぐ委員会では上下水道等も検討対象に含まれるようになる。このように市区改正全体としては、公衆衛生に関しての取り組みが審査会時代に比べて進展をみせていくこともあり、委員会における公園に対する衛生論の関心は相対的に下がっていく。それでも、委員会で検討された個別の公園計画をみると、下水整備の遅れた地区に重点的に公園計画を立てるなど、依然として土地の乾淨化を目的とした、瘴氣論に立った公園への期待も引き続き確認できる。

(3) 合理的レクリエーション

都市の肺臓論についてここまで、基本的には煙害などの大気汚染に対する環境装置として、加えてコレラ等の伝染病に対する防疫装置として公園を捉える認識をみてきたが、この機能を通して結局公園には、長与の審査会での説明にあったように、人々に「心身ヲ労役スルノ元氣ヲ鼓舞補給ス」ることが求められていた。これはある意味現在とさほど変わらない。この極めて基底的な公園の役割については後にまた触れることとして、まずは少し当時の考え方の背景にあったものを確認しておきたい。

明治18年4月の審査会で長与が示した公園の意義は先に示したが、長与はそれに先立つ同年2月の審査会で、まず市区改正の論議に公園を採り上げることを提案している。その発言は以下のようなものである。

(中略)繁昌地ニ「スクエル」ノ設ケナクハ第一空氣ヲ善良ニナスコト能ハサル(中略)是迄ハ府下ノ社寺境

内カ自然公園トナリ多少精神ヲ養フニ足リシト雖モ是以テ近時ハ其数ヲ減シ（中略）元来日本人ノ遊ヒハ卑屈極リテ演劇ヲ観ルトカ或ハ基ヲ圍ムトカ茶ノ湯トカ謠トカ甚タシキハ「芸妓ノ尻デモツネル」如キ総テ座敷内ノ遊興ニシテ真ニ不健康ノ至リナリ如キ文明社会ニ不健康ナル遊ヒヲナスハ必竟真ノ公園地ナキカ為メナルヘシ苟モ我日本国中君子ノ遊ヒヲナシテ精神ヲ養フ所ナキハ外国ニ対シ如何ニモ恥入次第ナリ左レハ市区ノ改正ニ際シ適当ノ地ヲ選ミ公園ヲ設ケ道路ニ広小路ヲ作ルハ最モ緊要ノコトニ属セリ就テハ之レカ委員ヲ置カレ其計画ノ詮議アランコトヲ切望ス¹⁰⁾

「空気」を「善良」にし、「精神を養う」公園の意義は既にみてきたことと合致するが、その精神を養う方向性が興味深い。日本人の遊びが「卑屈極まり」「真に不健康の至り」だというのである。これは外国に対して恥ずかしいとあることから、日本特有の議論にもみえるが、そうとも言い難い。例えば19世紀初頭の英国では、工場労働者の主な気晴らしの場はパブであったが、過度の飲酒に加えて動物虐待などの見世物に興じることなどが行われていた。これが上流階級からはいかがわしく不健全な遊びと見做され、それが工場等の生産性の低下にもつながることから、Moral reformの運動が展開された。例えば禁酒主義者トーマス・クックが庶民を保養地に連れ出す団体旅行を考案したことなどが知られているが、都市の公園も、不健全な遊びを健全なものに転換する、合理的なレクリエーション（rational recreation）のための場という位置づけがなされていた。長与がこの動きをどの程度知り、影響を受けていたかは不明の点もあるが、公衆衛生論に始まった東京での公園計画には、都市の肺臓という装置的な衛生概念だけでなく、「健全」な遊びを通して「健康」につなげようという啓蒙的意図が込められていたと考えることができる。

3. 防疫から保健・体力へ

（1）内務省『田園都市』における衛生論と公園

市区改正は大正8年（1919）の都市計画法公布により「都市計画」に継承されるが、その間の明治後期の議論として「田園都市」が挙げられる。エベネザー・ハワードの書にも影響を受けつつ、独自の論を展開したのが、内務省地方局有志による明治40年（1907）の『田園都市』である。もとよりハワードの田園都市論もそうであるように、内務省による本書も、都市の人口稠密化への対処、コロナ下の現在の表現を使えば「密の回避」を問題意識として都市と農村（ハワードの場合は town-country）の関係に議論を投げかけたものである。都市の劣悪な衛生環境に対す

る田園都市の優位性の主張が全体に通底している。例えば、

然らば即ち田園都市は（中略）其主眼とする所は、先づ労働者の家族をして、清新和楽の家庭を組織せしむるに在り。されば其住む所をして、殊に空気の流通と光線の透斜とを十分ならしめ、且附するに数畝歩の庭園を以てし、彼等をして労務の余暇には、出で出で此に農芸を習はしめ、一には之に依りて各自の健康を保持せしめ、一には其収益を挙げて生計の幾分を補助せしめんと図りぬ。¹¹⁾

というように、空気の問題にも触れられているが、ただしそれは煤煙問題などを想定しているようで瘴気論に立った土地の乾浄化への意識は既に薄れている。また衛生ではなく「保健事業の要義」として一章を割いて、生活改善とその担い手、塵芥処分、下水、食品検査、植樹、墓地問題等について論じている。なおここで植樹とは、空気を清新にするとして街路樹について述べられている。さらに公園に関しては、保健事業の章とは別の、「間時利導の設備」という章の中で採り上げられ、特に「青年職工」向けに、

『庶民公園』を設けて（中略）工場地の周縁を囲繞せしめんことを要す。かくて（中略）暫らく一切の労苦を忘れて、心身も自ら快活に、気力も亦清新となるべし。此の如くにして再び工場に帰り、各自の職業に復しなば、職工の爲めにも、又傭主の爲めにも、都合よく其一日の仕事を終はらざるはなからん。¹²⁾

とあるように、防疫との関連は既に消え、先にみた合理的なレクリエーションのための施設の考えが示されている。

（2）都市計画時代の衛生論と公園

大正期になると造園学という専門分野とその職能が形を現すようになる。都市計画制度が始まるなか、公園に関しては単体の公園を超えて公園相互の配置を工夫するシステムとしての公園計画が欧米の動向を参照に導入されるが、大正11年（1922）当時明治神宮造営局にいた折下吉延は、講演の中で以下のような話をしている。

（引用者注、公園は）市民の保健、慰安、子女の体力増進と云ふ点から「ネセサリー」のものなのであります（中略）熱鬧の市街に定住し或は喧噪の事務室に終日を送る人々は、不知不識の間に自ら神経過敏に陥るのであります、之等の人々に対し新鮮なる空気に充ちたる公園の緑陰で一時間の休息を与へ、暖かき日光に浴する芝生の逍遙は幾何の効果でありませう、恐らく病者に対する一杯の妙薬に優る萬々ではありますまいか。

公園、広場、運動場、並木道は勿論の事一般道路河川
 其他建築物を以て蔽はれざる処を自由空地と申しまして、
 都市の保健乃至保安の為に極めて必要なる事（中略）之
 れは何の為であるかと云ふに戸口増加の甚大なる市内の
 土地は（中略）一定の光線なり空気なりの流通が悪しく
 衛生上誠に寒心すべき状況にあるからである、（中略）
 就中公園は都会の肺臓であります、都会の濁った血即ち
 空気は循環して公園に来ては又蘇つて、さうしてぐるぐ
 る廻るのである即ち公園は都会の空気を新鮮にする所の
 肺臓である（中略）試に大都会に於ける空気中に含まれ
 て居る細菌の調べの一例を申して見ますと、（中略）
 一立方メートル内に於ける細菌の数は

公園内	九〇
人通り少なき並木道	一二〇
人通り多き並木道	五、八〇〇（後略） ¹³⁾

公園の効用は病に対する「妙薬」というもはや比喩とし
 て、「保健」の文脈で捉えられている。「都市の肺臓」のフ
 レーズがここでも生きているが、ただしそこには田園都市
 論同様に、かつての瘴気論はなく、その代わりに衛生上
 の効能が「細菌数」からの評価に置き換えられている。また
 合わせて、田園都市論の職工向け同様に、「中流以下」の
 「レクリエーションセンター（運動場本位の公園）」が注目
 されており、この意味で 19 世紀西欧の合理的レクリエーシ
 ョンの考え方がここでも強く意識されていた。

（3）保健増進から体力増強へ

市区改正当初の公園計画を主導したのは、前章で示した
 通り内務省衛生局であったが、明治 10-20 年代の実際の公
 園の所管は、内務省地理局などの地理行政であった。しか
 し明治 26 年（1893）に内務省衛生局の体制がそれまでの
 保健課から防疫課が分かれたのに伴い、明治 30 年（1897）
 には公園は内務省衛生局保健課の所管となった。ここにも
 防疫から保健への公園の位置付けの表れをみることもでき
 るが、ただし明治 21 年（1888）の市制・町村制に合わせて
 公園事務が地方に移管されたことも関係してか、衛生局自
 身の公園行政への姿勢は積極的でなかったという^{14)～16)}。

これが大正期の都市計画法施行に伴って大臣官房都市計
 画課が都市計画公園の事務を担うようになると、内務省衛
 生局も動きを示すようになる。大正 5 年（1916）に内務省に
 置かれた「保健衛生調査会」は、大正 9 年（1920）には「児
 童及妊産婦ノ保健増進」を目的に「都市ニハ児童ノ為メ遊
 園ヲ特設スルコト」を定め、また翌々年には「国民体力ノ
 増進ニ資シ併セテ剛健敢為ナル精神ヲ涵養シテ国力発展ノ
 素地ヲ培」うことを目的に「運動、競技、武術其ノ他積極
 的体力増進施設奨励ニ関スル建議」を決議するなどす
 る¹⁷⁾。またこの間大正 10 年（1921）には衛生局において

国立公園の検討が開始されている。これらの衛生局の公園
 への関与には、国民の保健増進、そのための体力増強の場
 に公園を活用する視点として、これも一連の合理的レクリ
 エーション概念の重視が窺えるが、これが一つの頂点に達
 したのが衛生局の再編が絡んだ昭和 13 年（1938）の厚生
 省の設置である。厚生省は例えば以下のように国民に説明
 された。

厚生省とは一体何をする所だらうか？『健全なる精神は
 健全なる身体に宿る』 長期持久の支那事变下、日本は
 一層健全なる精神と身体を求めてゐる。外に、近世史上
 曾つてない大事業をなしつつある日本は、内に、国民個々
 の体力の向上、衛生の完備、病魔の予防、社会施設、労
 働の合理化、保険制度の普及に一層務めなければならない。
 健全な日本民族となつた時の喜び、この喜びを生み
 出さうとするのが新設厚生省である¹⁸⁾。

「健全なる精神は～」という有名な言葉はローマの古い
 詩文の曲解によりこのころ喧伝され出したものという¹⁹⁾。
 これを標榜する厚生省の筆頭部局とされたのが、衛生局か
 ら分けられた「体力局」であり（1941 年まで）、公園行政
 はこの体力局施設課の所管となった。その結果、戦時中
 にも関わらず全国に運動公園や児童公園の整備が充実されて
 いき²⁰⁾、また国立公園は「健民地」と位置付けられた。
 そして昭和 15 年（1940）には国民体力法が制定され、国
 民の体力は国家が検査・指導し管理する対象となった。

4. 新型感染症と公園

以上、近代の公園計画論として、明治中期の市区改正以
 来、公園の重要な機能論として公衆衛生があり、それは基
 本的には都市の煤煙問題などに対処する大気浄化を通じた
 保健機能であったが、当初はそこに伝染病予防として土地
 を乾浄化する防疫機能も期待されていたこと、そして公園
 はその利用を通して人々の心身の健康を保ち増進すること
 が期待されていたが、それは健全で合理的なレクリエーシ
 ョンを前提としており、その合理性の追求が高じて戦時下
 では体力増強が国策化されたこと、などを述べてきた。

戦後の公園行政は国立公園以外が厚生省から離れるが、
 大きな流れとしてまずレクリエーションの合理性に対する
 考え方をみれば、これは遊びを何かのための手段と捉える
 のか、あるいは遊び自体の目的に意義を置くのかのバラン
 スから考えられる。近代から戦前の状況は、遊びを生産の
 ための合理的手段と捉え、その結果健康を強制するような
 考えがエスカレートした。戦後はそれが消えたわけではないが、
 基本的には子どもはもちろん、大人も遊びや余暇そ
 れ自体を楽しむことを自覚しかつ社会も認める時代にある。

次いで機能論をみれば、時代とともに様々に位置付けられている。例えば戦後まもなく、東京都の森脇龍雄は、都市公園の機能として保健・休養・教化・保安（防災の意）・美観・過大膨張抑制などを挙げた²¹⁾。降って現在では、例えば国土交通省は、観光・活力・子育て・防災・環境・文化・景観を挙げている²²⁾。保健は消えたのかといとそうではなく、「子育て」の中に健康・レクリエーションも含まれているようで、要は時代時代の社会の要請とともに公園に期待される機能も多様化しているということになる。

そして今回の新型コロナウイルスの蔓延下では、人々の行動制限、特に人と人の接触を減らすリモートワークなどが求められる中、公園については社会環境の変化に伴うストレスを軽減するメンタルヘルス上の役割が注目されている。ではこれを公園の機能の一つに明確に追加するのが良いのかといえ、それもあるとは思いますがここでは少し異なる考えを採りたい。先の森脇はその論考において、公園の機能に挙げたそれぞれについて、他に代替可能どうかを検討し、真に公園でなければ果たせない役割は何かを考察した。いわば方法的懐疑をもって公園の価値を追求したが、その結論は、「自然を舞台にした慰安休養（out-door recreation）」が公園の本質であるとした。これに従うならば、長与が「適度ノ運動ト新鮮ノ大気トニ由テ次日心身ヲ労役スルノ元氣ヲ鼓舞補給」「精神ヲ養フ」と述べ、後藤が「新鮮空气中ニ於テ休憩」「気力ヲ恢復スル」と語ったことは、当時のニュアンスは考慮すべきとしても今も通じる公園の本質に近い。

そうであるならば、この本質を公園の機能の一つに掲げたり、あるいは特別な基盤的機能に据えたりするのは違った考え方もあり得るのではないか。例えば、かつて空間の概念として非建蔽地、つまり建蔽地の補集合に「緑地」という概念が設定されたように、場所の概念として、労働や教育のための生産的な場から逃れる補集合的な場所に公園を位置付ける考えもあるのではないか。いわば緊張に充ちた「有縁」の場に対する、弛緩できる「無縁」の場としての公園である。そう考えるのも、生産に役立つ有縁の場の一つに公園を置くことは、レクリエーションを合理的なものに押し込めて生産性向上に資するものという近代の公園観とつながるもので、それが有事の際には人々に健康を強制するにまで至ったことを歴史が教えるからである。むしろ無縁の場というだけの存在に税金を注ぐことの理解は得にくい、そのために時代ごとの社会の要請に応じた機能の提示にも意義がある。それら諸機能の発揮を目指しつつも、根底では無縁の場である公園の意義を改めて考える機会が、今回の感染症によって与えられたのではないか。

ところで、目下の新型コロナウイルスは飛沫・接触感染で広がるとされ、さらに空気感染の可能性も指摘される（政府は正式には認めていないが）中で、「換気」が強調されるよ

うになった。19世紀は都市全体の換気が求められたのに対して、現在の換気は個々の空間の話で異なり、また細菌とウイルスという点でも状況は同じでない。しかし人々が懐く見えない病原体と空気への不安は、19世紀も今もあまり変わりが無いのではないか。現代の科学においても未だウイルスのことがよくわからないことを知るにつけ、かつての瘴気論を嗤うことはできない。むしろ、見えない敵に対する想像上の概念として科学が退けた瘴気・ミアスマ論は、心と体の健康について人間と土地を一体の連関の中に捉える有機体論的発想としてみると、環境と人間の関係を主に機械論的に捉える現代において、ランドスケープ科学にも刺激を与える思考ともいえないだろうか。ハワードの基本的な問題意識は、“how to restore the people to the land”²³⁾であったことも合わせて思い起こしておきたい。

補注及び引用文献

- 1) 見市雅俊（1999）：ロンドン＝炎が生んだ世界都市：講談社、270pp
- 2) Shapter, T. (1849): The history of the cholera in Exeter in 1832: London, John Churchill, 178
- 3) 2章は概ね拙著（2003）：公園の誕生：吉川弘文館、216ppに基づく。
- 4) 東京市区改正品海築港審査議事筆記（1988）：東京都市計画資料集成（明治・大正篇）31：本の友社
- 5) 緒方正規（1886）：土地ト衛生ノ関係：大日本私立衛生会雑誌 33, 1-33
- 6) 長与専斎（1887）：虎列刺病ノ予防ハ如何ナル方針ヲ取ルベキ乎：大日本私立衛生会雑誌 46, 3-21
- 7) 後藤新平（1890）：衛生制度論：319-321
- 8) 後藤前掲書、634-635
- 9) 森林太郎（1907）：衛生学大意：博文館、7-10
- 10) 前掲 東京市区改正品海築港審査議事筆記
- 11) 内務省地方局有志編纂（1907）：田園都市：20
- 12) 内務省前掲書、165
- 13) 折下吉延（1922）：公園計画：都市研究会編集『都市計画講習録全集』第二巻、1-52
- 14) 丸山宏（1994）：近代日本公園史の研究：思文閣出版、105-136
- 15) 水内佑輔・古谷勝則（2016）：帝国議会と行政の関係をふまえた国立公園行政の開始に関する研究：ランドスケープ研究（オンライン論文集）9, 63-71
- 16) 水谷知生（2021）：風景地の制度化の端緒：西田正憲編『国立公園と風景の政治学』、京都大学学術出版会、45-79
- 17) 丸山前掲書、137-159
- 18) 内閣情報部（1938）：厚生省とは：写真週報第一号、8
- 19) 今泉隆裕（2015）：〈健全なる身体に健全なる精神が宿る〉再考：桐蔭論叢（32）、79-86
- 20) 坂上康博（2009）：標的としての都市－厚生省による運動施設拡充政策の展開：『幻の東京オリンピックとその時代』、青弓社、279-319
- 21) 森脇龍雄（1948）：都市公園の本質：造園雑誌 12(1)、23-26
- 22) 国土交通省：公園緑地の多様な機能
<https://www.mlit.go.jp/toshi/park/toshi_parkgreen_tk_000064.html>、2021.8.17 参照
- 23) Ebenezer Howard (1902): Garden Cities of To-morrow: London, Swan Sonnenschein, 13